



原典研究

イブン・スィーナー著『治癒』 形而上学訳註（第一卷第四章）

イブン・スィーナー『治癒の書』研究会

訳・註 小林春夫

加藤瑞絵

倉澤理

矢口直英

索引 倉澤理

凡例

『イスラーム地域研究ジャーナル』五号（二〇一三年）一〇三―一三六頁に掲載した第一卷第三章訳註の凡例（一〇三―一〇四頁）に従う。

ただし、テキストの異読に関しては、Berolacci (tr.), pp. 114-129 の正誤表（Bに若干の修正が加えられている）を主として参照した。また、参考文献として以下の著書を追加する。

Das Buch der Genesung der Seele: Eine philosophische Enzyklopädie Avicennas. II. Serie: Die Philosophie. III. Gruppe und XIII Teil: Die Metaphysik, Theologie, Kosmologie und Ethik, transl. by Max Horten, Halle a.S. und New York: Verlag von Rudolf Haupt, 1907 (repr. Bibliothek, n.d.) (= Horten (tr.)).

Kitābu 's-Sifā, Metafizik, transl. by Ekrem Demiri & Ömer Türker, 2 vols., Istanbul: LiteraYayınları, 2004-2005 (= Demiri & Türker (tr.)).

第一卷第四章 この学において議論される事柄の全体について^①

25.4 我々はこの学術において、①「もの」および「存在者」と諸カテゴリーとの関係について、②「非存在」について^②、③必然的存在^③における^④「必然性」とその諸条件、「可能的存在における」「可能性」とその実相について明らかにしなければならない^⑤。またこれ（＝必然性と可能性についての考察）は「可能態」と「現実態」についての考察でもある^⑥。

25.6 次に、①「自体的なもの」と「附帯的なもの」について^⑦、②「真なるもの」と「偽なるもの」について^⑧、③「実体」とその区分について考察しなければならない^⑨。「実体の区分について」というのは、存在者が実体であるとき、自然科学的であったり数学的であったりする必要はなく、それ以外の実体も存在するからである^⑩。したがって、我々は次のことを明らかにしなければならない^⑪。④「質料」としての実体について、それはどのような在り方をしていのか^⑫。「形相から」離在するのかもしれないのか^⑬。種において一致するのかもしれないのか^⑭。形相との関係はどうなのか^⑮。「形相」的実体について、それはどのような在り方をしていのか。「質料から」離在するのかもしれないのか。⑥「質料と形相の」「結合体」はどのような在り方をしていのか。「質料と形相の」各々は「結合体」の定義においてどのような在り方をしていのか。また定義と定義されるものとの関係はどう

か¹⁵。

25.14

附帯性はある仕方であらうと対立するものであるから、我々はこの学において、①附帯性の本性とその種類¹⁶、②附帯性を定義する際の定義の在り方を¹⁷探究しなければならない。そして、③附帯性に属する各々のカテゴリーについて探究するとともに、④実体でないにもかかわらず実体であると憶測されるもの¹⁸について、それが附帯性であることを明示する。

26.1

すべての実体は先行と後行に即して序列をなして存在していること、附帯性も同様であることを明らかにしなければならない¹⁹。

26.3

次にこの箇所では、①「普遍」と「個」、②「全体」と「部分」、③「普遍的自然本性」の在り方——個物の中に存在するか、靈魂の中ではどのように存在しているのか、個物や靈魂から離れて存在するのか——について探究するのが適当である²⁰。またここでは、④「類」や「種」と、それに類似したものについても探究する²¹。

26.6

存在者が「原因」や「結果」であるとき、存在者は自然科学的であったり数学的であったり、またその他の何かであったりする必要はないので、以上の議論に続けて²²、①原因とその種類および様態、②原因と結果のあるべき関係、③作用原理（＝能動因）とそれ以外（の原因）との区別について論じるのが適当である²³。また、④作用すること（＝能動）と作用を受けること（＝受動）、⑤形相（因）と目的（因）との区別、両者の存在の確定、両者は各段階において第一の原因に行きつくこと（＝無限連鎖の否定）についても論じる²⁴。

26.13

〔このようにして〕原理と始原²⁵についての議論を明らかにする²⁶。さらに、①「先行」と「後行」²⁷、②「生成」とその種類および特徴²⁸、③自然本性において先行するものと知性において先行するものについて論じ、④知性において先行する事物の存在を確定するとともに、それを否定する者の語り口を検討する²⁹。また、これらの事柄に関して真理に反する通説があれば、それを論駁する³⁰。

26.17

以上の事柄³¹やそれに類するものは（存在である限りの存在）に附随するものであるが³²、「一」は「存在」と等値であるので、一についても考察しなければならない³³。一について考察するならば「多」についても考察し、両者が対立することを明らかにしなければならない³⁴。またここで、「数」について、数は存在者とのような関係にあるのか、ある面で数の対立物である「連続量」³⁵は存在者とのような関係にあるのかを考察しな

ければならない³⁶。また、数や連続量に関する誤った見解のすべてを列举し、いかなる数や連続量も存在者を離れて存在することはなく、存在者の原理でもないことを明らかにする³⁷。また、形態などのように、数および連続量に附帯するものを確定する³⁸。

27.4

さて、一に附随するものとしては、「同質」（＝質において一）、「同量」（＝量において一）、「同等」（＝関係において一）、「同類」（＝類において一）、「同様」（＝特性において一）、「同種」（＝種において一）、「同一」（＝相互に一）³⁹がある。我々はこれらを個別に論じるとともに、これらに対立するものについても論じるべきである。そして、これらに対立するものは、「非－同質」（＝質において多）、「非－同量」（＝量において多）、「非－同類」（＝類において多）、「非－同様」（＝特性において多）、「非－同種」（＝種において多）、「非－同一」（＝相互に多）⁴⁰に多に対応していること⁴¹、「差異」（*khilaf*）や「対立」（*taqadim*）とそれらの種類、真の意味での反対（*taḍadd*）とそれが何であるかについても論じる⁴²。

27.9

その後、存在者の諸原理に移る⁴³。そこで、①第一原理が存在すること⁴⁴、第一原理は最も卓越した在り方において「一」であり「真」であることを確定する。そして、②第一原理はいくつの側面から一であり⁴⁵、いくつかの側面から真であるのか⁴⁶、③第一原理はいかにしてすべてを知り、すべてをなし得るのか——そもそも第一原理が「知る」（知）とか「なし得る」（力）とかは何を意味するのか⁴⁷、④第一原理は「寛大」であること⁴⁸、⑤第一原理は「平安の源」すなわち「純粹善」⁴⁹であり、「愛されるもの」それ自体であり、真に「甘美なるもの」であり、真の「美しさ」をもつものであることを明らかにする⁵⁰。さらに、第一原理について述べられ憶測されている諸説で真理に反するものについては、これを排除する。

27.14

次に、以下の事柄を明らかにしよう。①第一原理とそれに由来する存在者との関係について、また第一原理から最初に生じるものについて⁵¹、②第一原理から生じる存在者の序列について——それは天使的・知性的実体始まり⁵²、天使的・靈魂の実体、天球の実体⁵³、「月下界の」元素⁵⁴、元素から構成される物体を経て人間に至る——、またこれらのものはどのようにして第一原理に回帰するのか⁵⁵、③第一原理がこれらのものにとって能動因であるとはどういうことか、また第一原理がこれらのものにとって完成因であるとはどういうことか、④人間靈魂は、自然界との結びつきを断たれるとき、どのような状態になるのか、またそのときの人間靈魂はどの階梯にある

のか⁵⁶⁾。

28.3 こうした議論とともに、預言者位の崇高さ、それに従うことの義務、預言者位は神に由来するもので必然的であることを示す⁵⁷⁾。また、人間靈魂が来世の幸福に与るために、哲学とともに必要とする徳と行為を提示し、その幸福の種類⁵⁸⁾についても明らかにする。

28.6 この地点に到達したとき、我々は本書を閉じるであろう。その成就においては、神のみが助け手である。

【註】

(1) 本章は学の冒頭に置かれるプロレゴメナの一方で、以下に論述されるこの学の内容構成について概観する。本書ではこれまでに、この学の主題と目的(第一卷第一章と第二章)、この学の有益性、序列、名称(同巻第三章)が述べられた。プロレゴメナの意味とイスラーム圏での受容については第三章の註(6)を参照されたい。

(2) ①と②については第一巻第五章で論じられる。

(3) 原文では「必然的」に *darūnī* が用いられているが、*ḥujjī* では *wājib* と同じ意味で用いられていると解釈する(Naraqī, p. 191を参照)。

(4) 底本Cの *ay* と *Naraqī* に従って *ay* と読む。

(5) ③については第一巻の第六章と第七章で論じられる。

(6) 可能性と必然性の概念と可能態と現実態の概念との対応関係については、第四巻第二章の該当箇所(*Ilahiyāt*, pp. 171-172)を参照。

(7) 「自体的な存在」と「附帯的な存在」の区別については第二巻第一章の冒頭(*Ilahiyāt*, p. 57)を「自体的な」と「附帯的な」の区別については第三巻第二章の冒頭(*Ilahiyāt*, p. 97)を参照。

(8) 第一巻第八章(*Ilahiyāt*, p. 48)を参照。
 (9) 第二巻第一章を参照。ここでは、実体の存在、附帯性との関係、実体であると同時に附帯性であることは不可能であること、実体の五区分(物体、形相、質料、靈魂、知性)について述べられている。

(10) 自然学や数学においても物体としての実体とその特性については論じられるが、非物体的な実体(靈魂や知性など)を含めた実体の包括的な探究は形而上学でなされなければならない、との意味。

(11) 第二巻第二章(物体的実体とその構成要素について)に該当。

(12) 第二巻第三章(物体的質料は形相を離れないこと)に該当。

(13) 四元素を構成する質料は同一であるのに対して、諸天圏を構成する質料は種において異なると考えられている(Naraqī, p. 196)。

(14) 第二巻第四章に該当。ここでは、形相は存在において質料に先行すること、結合体における両者の関係などが論じられる。

(15) これらの問題は第五巻の第七章(定義と定義対象との関係について)、第八章(真の定義について)、第九章(定義とその部分について)において論じられる。

(16) 実体を除く九つのカテゴリーについては第三巻の諸章において詳述されている。

(17) 第五巻第八章で、附帯性の定義と、附帯性と実体からなる複合体の定義について論じられている。

(18) 「量」については第三巻の第三章、第五章、「質」については第七章、第九章、「関係」については第一〇章が該当する。

(19) 「量」に関しては、線・面・空間を物体を構成する実体であるとする説や、数を実体の構成原理であるとする説が論破されている(第三巻第三章)。「質」については、色や味や臭いを感覚的実体を構成する実体であるとする説などが論破されている(第三巻第七章)。また第三巻第八章では、実体についての知は実体かという疑問に対して、知は附帯性であることが論じられている。

(20) このテーマは第四巻の内容に相当する。この巻は次の言葉で始まっている。我々は「存在」と「一」の種に相当する事柄について論じたので、次にそれらの特性と不可分離的附帯性に相当する事柄について論じるべきである。そこでまず、「存在」に関わるものとして「先行」と「後行」から始めることにしよう。(*Ilahiyāt*, p. 163)

これに続けて、第一章では先行と後行の多義性(空間・時間的、自然本性的・技術的、存在論的、因果論的など)が論じられる。そして第二章では可能態と現実態の先後関係や、生成物における質料と形相の先後関係などが論じられ、第三章では完全性とその類似概念が論じられる。

存在者の階層性に関して『救済の書』(*al-Najāt*, pp. 208-209)では、存在者を実体と附帯性へと区分した上で、実体を①離在的・非物体的実体、②形相、③物体、④質料に序列化し、附帯性を①恒常的附帯性、②非恒常的附帯性、③恒常的附帯性に帰属する附帯性、④非恒常的附帯性に帰属する附帯性に序列化している。最後④の例として挙げられる時(「いつ」のカテゴリー)は存在者の末端に位置するもので、他のいかなる存在者の原因でもない。

(21) ①③は、第五巻の第一章(普遍的事象とその存在について)および第二章(普遍的自然本性の様態、普遍・個と全体・部分との違いについて)に対応する。

(22) 類については第五巻の第三章と第四章において、種については第五章において述べられる。またそれら(類と種)に類似するものとして、「種差」については第六

- 章で、「定義」については第七章と第八章で論じられる。
- (23) Cの al-kalam に代えて、I および Narāqī を参考にし bi-*al-kalam* を採用する。
- (24) 原因と結果については第六巻が充てられている。本巻は以下の言葉で始まる。
我々は実体と附帯性について論じ(第二巻、第三巻)、それらの先行と後行について論じ(第四巻)、普遍的であれ個体的であれ、定義されるものと定義との一致対応について論じたので(第五巻)、ここでは原因と結果について論じるのが適当である。なぜならば、原因と結果もまた「存在者である限りの存在者」に附随するものだからである。(I*lāhīyāt*, p. 257)
- (25) ①～⑤の内容は、第六巻各章の内容に対応している。
- 第一章：原因の区分とその様態について
第二章：原因と結果の同時性について
第三章：作用因とその結果との関係について
第四章：質料因・形相因・目的因について
第五章：目的因の存在確定、他の原因との関係、目的と善などについて
なお、因果の無限連鎖が不可能であることについては、本巻第二章(I*lāhīyāt*, pp. 265-266)や第五章(I*lāhīyāt*, pp. 289-291)で論じられる他に、第八巻の第一章から第三章においては、因果連鎖の有限性を通じて、すべての存在者の第一原理(必然的存在者)が導出される。
- (26) 「始原」と訳した語 *ibtida'* は原理 (*mabda'* = 原因) と同じ語根から派生する動名詞で、原理(原因)を有すること、物事の始まりなどを意味する。イブン・スィーナにおける創造論、存在論の中心テーマの一つである。
- (27) この一文については二通りの解釈がある。第一は、この文を前段落から切り離れた上で、前段落の内容全体(原因論)を受け、それを要約しているとする解釈である。第二は、この文の直前で述べられている内容(諸原因は第一の原因に行きつくこと)を受けて、因果連鎖の有始性について述べているとする解釈である。前者は現代の訳者(マルムラ、リッチーニ、ベルトラッチ)が採用する読みであり、後者はモッラー・サドラー、ナラーギーらが採用する読みである。ここでは措辞の観点から前者を採用したが、内容的にはいずれの解釈も可能である。
- (28) 註(20)で述べたように、先行と後行については第四巻が充てられている。また第六巻においても、その第二章では原因と結果の同時性が、第三章では作用因とその結果の間の存在論的先行性(時間的ではない)が、そして第五章では目的因とそれ以外の諸原因との先行性と後行性が論じられる。
- (29) 第六巻第二章(I*lāhīyāt*, pp. 266-267)で「生成の諸義(時間的、非時間的など)が論じられる。また第四巻第二章(I*lāhīyāt*, pp. 181-182)では、時間的生成(時間の内非存在の状態から存在の状態へと転化すること)には質料を必要とすること
- が論じられる。
- (30) ④の対応箇所として、ベルトラッチは第一巻の第五章～第七章(「存在者」も)の「必然性」などの原理的概念についてと第一巻第八章(「排中律」と、それを否定する詭弁の論駁について)を挙げている。しかし、これまでの議論の流れからみて、第四巻第一章(先行・後行の諸義について)、第六巻第二章(原因と結果の同時性)、第五章(目的因と他の諸原因との関係)などを指すとみる方が適当と思われる。
- (31) モッラー・サドラーやナラーギーに従って、「さらに」以下は主として第四巻と第五巻で述べられる内容(本訳の段落「4」と「5」で提示された内容と部分的に重複)を指すととる。この段落冒頭の「原理と始原についての議論」が第六巻の内容に相当するとすればテキストの実際の配列と一致しないことになるが、次註で述べるように、ここでは第四巻から第六巻までのテーマを「存在者」である限りの存在(者)に付随するもの」として総括的に提示していると解釈したい。
- (32) 「以上の事柄」について、モッラー・サドラー(Sadrā vol. 1, p.107)は第四巻(先行と後行、潜勢態と現実態、完全性など)、第五巻(普遍と個、全体と部分、類・種・種差、定義と被定義など)、第六巻(原因と結果)の内容を指すと解釈している。
- (33) 第一巻第二章で論じられたように(本訳註の第一巻第二章「12」「13」、形而上学の主題は「存在者である限りの存在者」であり、その探求対象は「存在者である限りの存在者」に付随する事柄であったが、この「附随」する仕方にも①「種のようなもの」として付随する場合と、②「固有の附帯性(特性または不可分離の附帯性)のようなもの」として付随する場合があった。①には実体やその他のカテゴリーが該当し、「以上の事柄」は②に該当する。このことは上の註(20)で引用した第四巻冒頭の一文にも明示されている。
- (34) 存在と一とが等値であることについては、第七巻第一章(I*lāhīyāt*, p. 303)を参照。また、一の様々な意味については第三巻第二章を、一の定義については同巻第三章(I*lāhīyāt*, pp. 104-106)を参照。
- (35) 第三巻第六章(一と多の対立について)を参照。
- (36) 「連続量」*kamm mutasajj*(一般的に言う量)に対して、「数」は「非連続量」*kamm munfasil*と呼ばれる。これら二語に共通する *kamm* (Kammīyah も同義) は疑問詞 *kam* 「どれだけか」に由来するが、この疑問詞は数・量いずれの問いにも用いられる。また一般には、*adad* (数)と *miqdār* (量)の語が用いられる。
- (37) 「数」については第三巻の第三章(一と多について、数は附帯性であることについて)と第五章(数とは何か、またその種類と最小数について)を参照。「量」については同巻第四章(量は附帯性であること)を参照。

- (38) 第七巻の第二章(イデアおよび数学的原理を唱えた古代の哲学者たちの所説と、彼らが誤謬に陥った原因について)および第三章(数学的原理およびイデア論批判)を参照。また第三巻第三章 (*Ishārāt*, pp. 106-110) では、「一は事物から離在不可能な附帯性であることが論じられる。
- (39) 連続量に附帯する性質とは円、曲線、球、円柱、円錐などの形態を指す。これらについては第三巻第九章を参照。また、数に附帯する性質とは、奇数、偶数、合成数、完全数、平方数、立方数、無理数などを言う (*Ishārāt*, p. 119)。
- (40) 第七巻第一章(一および多に附随するものについて)を参照。この箇所 (*Ishārāt*, p. 304) では *nuwāṭiq* の代わりに *muṭāṣib* がリストに挙げられているが、その他の語彙との照応関係から推測して両者はともに「同等」を意味すると考えられる。また訳文のカッコ内の補足説明はこの箇所の記述によった。「一」の諸義については第三巻第二章も参照せよ。
- (41) ここで「非-同類」などと直訳した原語は「同類」(*mujānis*)に否定詞 *ghayr* を付けた形 (*ghayr mujānis*) である。アラビア語では形容詞や分詞などの否定に *ghayr* が多用される。
- (42) 第七巻第一章(一および多に附随するものについて)を参照。
- (43) 以下のテーマは第八巻の内容に対応するが、同巻は次のような序言で始まっている。
我々の書もこの地点に到達したので、全存在の第一原因についての知で本書を閉じるのがよからう。すなわち、第一原因は存在するのか、第一原因は唯一で、位階においてそれと対等なものやそれに匹敵するものは存在しないのであろうか。また我々は「続く第九巻において」——この第一原因の助けを乞いつつ——存在における第一原因の位階、その下位にある諸存在者の配列と位階、諸存在者が第一原因に回帰する様態を提示しよう。 (*Ishārāt*, p. 327)
- (44) 第八巻第一章(能動因と質料因の有限性について)、第二章(疑問と解決)、第三章(目的因と形相因の有限性、第一原理の定立、第一原因とその他の原因について)を参照。
- (45) 第八巻の第四章(必然的存在者たる原理の第一の属性について)および第五章(必然的存在者の唯一性とそれに伴う否定的属性について)を参照。
- (46) 第八巻第六章の該当箇所 (*Ishārāt*, p. 356) を参照。
- (47) 「知」(*ilm*) については第八巻の第六章と第七章の該当箇所 (pp. 356-366) を、「力」(*qudrāh*) については同第七章の該当箇所 (*Ishārāt*, pp. 366-368) を参照。
- (48) 第八巻第七章の該当箇所 (*Ishārāt*, p. 367) を参照。
- (49) 「純粹善」(*khayr mahdī*) については第八巻第六章 (*Ishārāt*, pp. 355-356) を参照。「平安の源」(*al-salam*) については直接の言及はないが、純粹善の一側面として挙げられている「悪および欠如から超越していること」ないし「存在とその完全性を付与すること」の中に含意されていると見ることが出来る。なお、この箇所でも挙げられている第一原因の属性(名称)のうち、「一」(一なる者 *al-wahid*)、「真」(真なる者 *al-ḥaqq*)、「知」(すべてを知る者 *al-ʿalīm*)、「力」(全能なる者 *al-qādir*)、「平安」(平安を与える者)などはクルアーンに登場する神名(美称)であり、イスラーム思想における重要な探究テーマ(神名論、属性論)となっている。
- (50) 「愛されるもの」(*ma-shūq*)、「甘美なるもの」(*ladhīḥ*)、「美」(*jamāl*)を持つものについては第八巻第七章の該当箇所 (*Ishārāt*, pp. 368-370) を参照。
- (51) 第九巻第四章 (*Ishārāt*, pp. 403-404) を参照。
- (52) Cの *mubtadi' u-hu* を I に従って *mubtadi' atan* と読む。
- (53) 第一原理から天神的・知性的実体(離在的知性)、天神的・靈魂的実体(天体靈魂)、天球の実体(天圏)が発出するメカニズムについては、第九巻第四章で詳しく述べられる。
- (54) 天界と月下界の四元素との関係については、第九巻第五章で論じられる。
- (55) 第一原理からの諸存在者の発出とそこへの回帰については、第一〇巻第一章の冒頭 (*Ishārāt*, p. 435) で要約されている。
- (56) 人間靈魂の第一原理への回帰については、第九巻第七章(回帰について)が充てられている。
- (57) 第一〇巻第二章(預言者職の確定と、神の存在と神への回帰に関する宣教の在り方について)と第三章(宗教儀礼と、現世と来世におけるその効用について)を参照。
- (58) 来世における人間の幸福の種類については第九巻第七章で詳論される。また幸福と実践的徳との関係について同章の該当箇所 (*Ishārāt*, pp. 429-431) を参照。

アラビア語語根索引

この索引は『治癒』形而上学アラビア語テキスト(第一巻第四章)に出現する重要語彙をアラビア語の語根により配列したものである。それぞれの語彙の下にテキスト中に出現する語形を挙げ、対応する訳語を添えた。出典はテキストCの頁数と行数で示した。

ʾ-kh-r	— ta'akkhur 「後行」 26.2, 26.13	h-q-q	— jawhar sūf 「形相」的美体」 25.11
ʾ-l-h	— sa'adah ukhrawyah 「来世的幸福」 28.5	h-d-h	— jawāhir malakiyah 'aqliyah 「天性的・知性的美体」 27.16
ʾ-n-s	— Allāh 「神」 28.4, 28.6	h-d-d	— jawāhir malakiyah nafsāniyah 「天性的・霊魂的美体」 27.17
ʾ-w-l	— insān 「人間」 27.18	h-d-d	— jawāhir falakiyah samāwīyah 「天球的美体」 27.17
	— nafs insāniyah 「人間霊魂」 28.1, 28.4	h-d-d	— hudūth 「生成」 26.13
	— 'illah ulā 「第一の原因」 26.12	h-d-d	— hudūd 「定義」 25.13, 25.15
	— mabda' awwal 「第一原理」 27.9	h-d-d	— hudūd 「定義」 25.13, 25.15
	— mā awwal al-ashya' 「最初に生じたもの」 27.14	h-d-d	— mahdūd 「定義」 25.13
b-d-ʾ	— mabda' 「原理」 26.9, 26.13, 27.3, 27.9, 27.18, 28.1	h-d-d	— hudda 「定義」 25.15
	— ibidā' 「始原」 26.13	h-d-d	— haqqiqah 「実相」 25.6
b-t-l	— mabda' awwal 「第一原理」 27.9	h-d-d	— haqq 「真」 25.7, 26.16, 27.14; 「真」 27.10, 27.11; 「真」 27.13
b-b-ʾ	— baṭil 「偽り・誤り」 25.7, 27.2	h-k-n	— taḥqīq 「確定」 26.15
th-b-t	— tawābi' 「附随」 27.5	h-k-s-s	— bi-al-haqqiqah 「真の意味」 27.8
	— ithbat 「確定」 26.11	kh-l-f	— hikmah 「哲学」 28.4
j-z-ʾ	— athbata 「確定」 27.3, 27.9	kh-l-f	— khūṣṣiyah 「特徴」 26.14
	— juz' 「部分」 26.3	kh-l-f	— mukhtalif 「異なり」 25.11
j-l-l	— a'yan juz'iyah 「個物」 26.4	kh-l-f	— mukhtalif 「異なり」 26.16
j-m-l	— jalālah 「卓越・崇高」 27.10, 28.3	kh-l-q	— khilāf 「差異」 27.8
	— jumlah 「全体」 25.3	kh-y-r	— akhlāq 「徳」 28.4
	— bi-al-jumlah 「一般」 27.8	kh-w	— khayr mahd 「純粹善」 27.12
j-n-s	— jamāl 「美」 27.13	dh-w	— bi-al-dhāt 「自体的」 25.6
	— jins 「類・種類」 26.6, 26.8	kh-w	— li-dhātihī 「それ自体」 27.13
	— mujānis 「同類」 27.5	kh-w	— marrabah 「序列・階梯」 26.1, 28.2
j-w-d	— ghayr al-mujānis 「非同類」 27.7	kh-w	— murakkab 「結合体」 25.12
	— jawād 「寛大」 27.12	kh-w	— sa'adah ukhrawyah 「来世の幸福」 28.5
j-w-h-r	— jawhar 「美体」 25.7, 25.8, 25.9, 25.14, 25.16, 26.1	kh-w	— sa'adah 「幸福」 28.5
		kh-w	— salām 「平安」 27.12
		kh-w	— jawāhir falakiyah samāwīyah 「天球的美体」 27.17
		kh-w	— musāwīq 「等値」 26.17
		kh-w	— musāwī 「同量」 27.5
		kh-w	— ghayr al-musāwī 「非同量」 27.7
		kh-w	— shabih 「同質」 27.5
		kh-w	— ghayr shabih 「非同質」 27.7
		kh-w	— ashakāl 「形態」 27.4
		kh-w	— mushakīl 「同様」 27.5

	— ghayr al-mushākil 「非一同様」 27.7	f-r-q	— muḥarrif 「離在せる・離れぬ」 25.10, 25.12, 26.5, 27.3
sh-y-	— shay' 「物の・事物」 25.4, 26.15, 27.3, 27.15, 27.18	f-r-q	— ḥurūf 「區別」 26.9, 26.10
s-n-	— sinā'ah 「學術」 25.4	f-'-l	— ḥāl 「現実態」 25.6; 「作用せる」 26.10
s-n-f	— asnaf' 「種類」 25.15, 26.14, 27.8, 28.5	f-'-l	— ḥā'it 「能動因」 26.10, 28.1
s-w-r	— sūrah 「形相」 25.11	f-'-l	— mabda' ḥā'it 「作用原理」 26.10
	— jawhar sūri 「形相」の実体」 25.11	f-l-k	— infī' al 'amal 「作用を受けざる」 26.10
d-d-d	— sūrah 「形相 (因)」 26.11	q-b-l	— jawāhir falakīyah samāwīyah 「天球の実体」 27.17
	— tadādd bi-al-ḥaqīqah 「真の意味の反対」 27.8	q-b-l	— muqābil 「対立せる」 25.14, 27.6
d-r-r	— mudādd li-l-ḥaqq 「真理の反対」 27.14	q-b-l	— taqābul 「対立」 26.19, 27.8
	— al-wujūd al-darūrī 「必然的存在」 25.5	q-b-l	— qābala 「対立せる」 27.2
f-b-'	— tabī'ī 「自然学的」 25.8, 26.7	q-d-r	— qādir 'alā kull shay' 「すべてをなす得ぬ」 27.11
	— tabī'ah 「本性」 25.15; 「自然本性」 26.15; 「自然界」 28.2	q-d-r	— qādira 「なす得ぬ」 27.12
f-b-q	— tabī'ah kuḥfiyah 「普遍的自然本性」 26.4	q-d-r	— qadr 「(預言者)位」 28.3
	— tabaqah 「段階」 26.11	q-d-m	— taqaddim 「先立」 26.2, 26.13
-d-d	— 'adad 「数」 27.1, 27.4	q-s-m	— mutaqaddim 「先行せる (する)」 26.14, 26.15
-d-m	— 'adam 「非存在」 25.5	q-w-l	— maqūlāt 「カテゴリー」 25.4, 25.16
-r-d	— bi-al-'arad 「附带的」 25.7	q-w-y	— quwāh 「可能態」 25.6
	— 'arad 「附帯性」 25.14, 25.15, 25.16, 26.2	k-th-r	— kathīr 「多」 26.19
	— 'aradīyah 「附帯性」 26.1	k-l-l	— kathrah 「多」 27.7
	— 'awārid' 「附帯せる」 27.4	k-m-l	— kull 「全体」 26.3
'-sh-q	— 'arada 「附帯せる」 27.4	k-m-l	— kamālī 「完成因」 28.1
'-q-l	— ma' shūq li-dhātini 「愛されるもの」それ自体」 27.12	k-n-m	— kamm mutasīl 「連続量」 27.2, 27.4
	— 'aql 「知性」 26.15	k-w-n	— mukawwanāt 「構成される物体」 27.18
	— jawāhir malakīyah 'aqliyah 「天使的・知性的実体」 27.16	l-'-k	— jawāhir malakīyah nafsānīyah 「天使的・知性的実体」 27.16
'-l-l	— 'illah 「原因」 26.7, 26.8	l-h-q	— jawāhir malakīyah nafsānīyah 「天使的・知性的実体」 27.17
	— 'illah ula' 「第一原因」 26.12	l-dh-dh	— jawābir malakīyah 'aqliyah 「天使的・知性的実体」 27.18
'-l-m	— ma' lūl 「結果」 26.7, 26.9	l-h-q	— jawābir malakīyah nafsānīyah 「天使的・知性的実体」 27.18
	— 'ilm 「知」 passim.	l-h-q	— jawābir malakīyah nafsānīyah 「天使的・知性的実体」 27.18
	— ta'lim 「数学的」 25.9, 26.7	mā'nyah	— mā'nyah 「それが何である」 27.8
	— 'alima kull shay' 「すべてを知ぬ」 27.11	m-th-l	— munnāḥil 「回種」 27.5
'-n-l	— a'māl 「行為」 28.4	m-h-d	— khayr mahd' 「純粹善」 27.12
'-n-s-r	— 'anasīr 「元素」 27.17	m-k-n	— imkān 「可能性」 25.5
'-w-d	— 'āda 「回帰せる」 27.18	n-b-w	— qadr al-nubūwah 「預言者位」 28.3
'-y-n	— a'yān 「個物」 26.4, 26.5	n-s-b	— nisbah 「關係」 25.4, 25.11, 27.1, 27.14
gh-y-y	— ghāyah 「目的 (因)」 26.11		

n-f-s	— munāsabah 「關係」 25.13
	— munāsib 「対応」 27.6
	— nafs 「靈魂」 26.5
	— jawāhir malakīyah nafsanīyah 「天使的・靈魂的実体」 27.17
	— nafs insānīyah 「人間靈魂」 28.1, 28.4
n-w-'	— naw' 「種」 25.11, 25.14, 26.6, 26.14
h-w	— al-huwa huwa 「回」 27.6
hayūlā	— hayūlā 「質料」 25.10
w-j-b	— wujūb 「必然性」 25.5; 「義務」 28.3
	— wājib 「必然的」 28.3
w-j-d	— mawjūd 「存在者」 25.4, 25.8, 26.6, 27.1, 27.2, 27.3, 27.9, 27.14, 27.16
	— al-wujūd al-darūrī 「必然的存在」 25.5
	— wujūd 「存在・存在者」 26.2, 26.4, 26.5, 26.18, 28.2
	— wujūd bi-mā huwa wujūd 「存在の限りの存在」 26.17
w-s-l	— wāhid 「一」 26.17, 26.18, 27.5, 27.9, 27.10
	— kamm mutasā'il 「轉體」 27.2, 27.4
w-f-q	— mutafiq 「一致」 25.10
	— muwāfiq 「回等」 27.5

日本語索引

この索引は『治癒』形而上学アラビア語テキスト(第一卷第四章)に出現する重要語彙を示したものである。それぞれの語彙に対応するアラビア語をカッコ内に挙げ、出典をテキストCの頁数と行数で示した。

あ	愛されるもの(なれ自体) (ma'shūq li-dhātih) 27.12
	一・一(ワヒド) (wāhid) 26.17, 26.18, 27.5, 27.9, 27.10
	一致(ワフイ) (mutafiq) 25.10
	一般 (bi-al-jumlah) 27.8
	美(ハム) (jamāl) 27.13
か	等値 (musāwīq) 26.17
行	回帰(ワダ) (āda) 27.18
	階梯 (maratabah) 28.2
	學術 (sin'ah) 25.4
	確定 (taḥqīq) 26.15
	(ihbāt) 26.11
	確定(アハバタ) (athbata) 27.3, 27.9
	数 ('adad) 27.1, 27.4
	カテゴリー (maqūlāt) 25.4, 25.16
	可能性 (imkān) 25.5
	可能體 (quwah) 25.6
	神 (Allāh) 28.4, 28.6
	關係 (nisbah) 25.4, 25.11, 27.1, 27.14
	(munāsabah) 25.13
	完成因 (kamālīf) 28.1
	寛大 (jawād) 27.12
	甘美(アハド) (ladrīdh) 27.13
	義務 (wujūb) 28.3
	区分 (aqsām) 25.7
	区別 (furqān) 26.9, 26.10
	形相 (ṣūrah) 25.11
	形相 (ṣūrah) 26.11
	「形相」的実体 (jawhar ṣūrah) 25.11

な
行

- 形態 (ashkal) 27.4
- 結果 (ma'jul) 26.7, 26.9
- 結合体 (murakkab) 25.12
- 原因 ('illah) 26.7, 26.8
- 現実態 (fi'l) 25.6
- 元素 ('anāsir) 27.17
- 原理 (mabda') 26.9, 26.13, 27.3, 27.9, 27.18, 28.1
- 行為 (amāl) 28.4
- 構成される物体 (mukawwanāt) 27.18
- 後行 (ta'akhhur) 26.2, 26.13
- 幸福 (sa'ādah) 28.5
- 個 (juz') 26.3
- 個物 (a'yan) 26.4, 26.5
- 作用を受ける (fi'l) 26.10
- 作用を受け (imfi'āl) 26.10
- 始原 (ibtidā') 26.13
- 自然本性 (tabr'ah) 26.15
- 自然界 (tabr'ah) 28.2
- 自然学的 (tabr'i) 25.8, 26.7
- (それ) 自体 (li-dhātihī) 27.13
- 自体的 (bi-al-dhāt) 25.6
- 実相 (haqiqah) 25.6
- 実体 (jawhar) 25.7, 25.8, 25.9, 25.14, 25.16, 26.1
- 質料 (hayūlā) 25.10
- 種 (naw') 25.11, 25.14, 26.6, 26.14
- 種類 (asnaf) 25.15, 26.14, 27.8, 28.5
- 純粹善 (khayr mahd) 27.12
- 序列 (marātib) 26.1
- 真 (haqq) 27.10, 27.11
- 真なるもの・真理 (haqq) 25.7, 26.16, 27.14
- 真に・真の (haqq) 27.13
- 真の意味 (bi-al-haqiqah) 27.8
- 数学的 (ta'imnī) 25.9, 26.7
- 崇高 (jalalah) 28.3
- 生成 (huduth) 26.13

た
行

- 先行 (taqaddum) 26.2, 26.13
- 先行 (ta'addim) (mutaqaddim) 26.14, 26.15
- 全体 (jumlah) 25.3
- (kull) 26.3
- 差異 (khiṭāf) 27.8
- 存在・存在 (wujūd) 26.2, 26.4, 26.5, 26.18, 28.2
- 存在者 (mawjūd) 25.4, 25.8, 26.6, 27.1, 27.2, 27.3, 27.9, 27.14, 27.16
- 〈存在である限りの存在〉 (wujūd bi-nā huwa wujūd) 26.17
- 多 (kathir) 26.19
- (kathrah) 27.7
- 第一原因 ('illah tilā) 26.12
- 第一原理 (mabda' awwal) 27.9
- 対応 (munāsib) 27.6
- 対立 (taqābul) 26.19, 27.8
- 対立 (qābala) 27.2
- 対立 (muqābil) 25.14, 27.6
- 段階 (tabaqah) 26.11
- 知性 ('aql) 26.15
- 定義 (ḥudūd) 25.13, 25.15
- 定義 (ḥuddā) 25.15
- 定義 (mahdūd) 25.13
- 哲学 (hikmah) 28.4
- 天球の実体 (jawāhir falakīyah samāwīyah) 27.17
- 同一 (al-huwa huwa) 27.6
- 同質 (shabih) 27.5
- 同種 (munāthil) 27.5
- 同等 (muwāfiq) 27.5
- 同様 (mushākil) 27.5
- 同量 (musāwīf) 27.5
- 同類 (mujaṅis) 27.5
- 徳 (akhlāq) 28.4
- 特徴 (khusūsiyah) 26.14
- 人間 (insān) 27.18
- 人間靈魂 (nafs insāniyah) 28.1, 28.4
- 能動因 (fā'iḥ) 26.10, 28.1

な
行

- 人間 (insān) 27.18
- 人間靈魂 (nafs insāniyah) 28.1, 28.4
- 能動因 (fā'iḥ) 26.10, 28.1

は	反する (mukhālif) 26.16 (muḍādd) 27.14
行	反対 (tadādd) 27.8 非存在 ('adam) 25.5 必然性 (wujūb) 25.5 必然的存在 (al-wujūd al-darūrī) 25.5 必然的である (wājib) 28.3 非一回質 (ghayr shabih) 27.7 非一回様 (ghayr al-mushākil) 27.7 非一回量 (ghayr al-musāwī) 27.7 非一回類 (ghayr al-mujānis) 27.7 附随する (lawābi') 27.5 (lawābiq) 26.17 附帯する ('arada) 27.4 附帯する (awāriḍ) 27.4 附帯性 ('arad) 25.14, 25.15, 25.16, 26.2 ('aradīyah) 26.1 附帯的 (bi-al-'arad) 25.7 部分 (juz') 26.3 普遍・普遍的 (kullī) 26.3 普遍的自然本性 (tabī'ah kullīyah) 26.4 平安の源 (salām) 27.12 本性 (tabī'ah) 25.15, 26.4 目的〔因〕 (ghāyah) 26.11 もの・事物 (shay') 25.4, 26.15, 27.3, 27.15, 27.18 預言者位 (qadr al-nubūwah) 28.3 来世の幸福 (sa'ādah ukhrawyah) 28.5 離在する・離れる (mutāriq) 25.10, 25.12, 26.5, 27.3 類・種類 (jins) 26.6, 26.8 靈魂 (nafs) 26.5 天使的・靈魂の形体 (jawāhir malakīyah nafsāniyah) 27.17 連続量 (kamm mutasīl) 27.2, 27.4
ま	行
や	行
ら	行